
人魂料理

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人魂料理

【Nコード】

N2192S

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

秀は食えることが趣味である。その彼がある漫画を見て人魂を料理しようと思いついた。さて、その料理と味は。あの妖怪漫画を見てヒントを得た作品です。

第一章

人魂料理

八坂秀は薄い眉に黒髪をワイルドな、狼を思わせる髪型にしている。

顔は白く面長で鼻の形は優しい。唇も薄く淡い桃色である。目は奥二重になっていて優しげなものである。背は一八〇程ですらりとしている。足が長い。

大学に通っていて趣味は料理と食べることだ。その彼がふと仲間内で言ったのであった。

「なあ、漫画で読んだんだけどな」

「何だ？ また料理か？」

「そのことか？」

「ああ、そのことになるな」

実際にそうだと答える彼だった。

「それになるな」

「で、何の料理だ？」

「今度はどんな料理を考えてるんだ？」

「変わった料理だよ」

こうも話す彼だった。

「ええとな、それでな」

「ああ、それで」

「どんな料理なんだよ」

「人魂だよ」

彼は言った。

「人魂を料理して食べたいんだけれど」

「おい、何の漫画読んだんだよ」

「いつものグルメ漫画じゃねえのかよ」

「ああ、あの有名なお化けの漫画だよ」

何度もアニメ化されている。まさに国民的となっているその漫画だというのである。

「それ読んでたら人魂が出ててな」

「そういえばそれ食う場面あったな」

「そうだな」

話を聞く面々もここで頷いた。

「出て来ることは出て来るよな」

「それで食われてるよな」

「あれ見て思ったんだよ」

秀の言葉は続く。

「滅茶苦茶美味いんじゃないかってな。人魂ってな」

「何かつるんとした感じするよな」

「で、天麩羅にして食ってたな」

「あれか」

「あれを食いたいのか」

「ああ、食いたい」

彼はここでははつきりと言った。

「一回だけでいいからな」

「食えるのかね、実際に」

「どうかね、それって」

皆彼の話を聞いて今度はいぶかしむ顔になった。

「それで美味しいのかね」

「漫画じゃ美味そうだけれどな」

「それは食ってみてわかるだろ」

秀はまた皆に話した。大学の喫茶店の中でコーヒーを飲みながら話をしている。白い店の中の白いカップの中に黒いコーヒーが映えている。

それを飲みながらだ。彼は皆に話すのだった。

「実際にな」

「そうか、食うか」

「どうしてもか」

「ああ、食う」

彼は既に決めていた。そしてであった。
さらにだ。こう皆に話すのであった。

「それで今夜な」

「おい、早速だな」

「もう人魂食うのか」

「そうするつもりか」

「人魂って確か墓場にいたよな」

そのいる場所についても話をするのだった。

「漫画とかじゃそうだよな」

「あれって人間の魂だよな」

「そうだよな」

「色々言われてるけれどな」

「だよな」

「だから墓場でふわふわと飛び回ってるよな」
漫画で得た知識を話す秀だった。

「それじゃあ。早速な」

「人間の魂食うのか」

「すげえ悪いことのような気がするな」

「ちよっとな」

「いや、待てよ」

ここでまた話されるのだった。

第二章

「あれって魂じゃないかもっていうしな」

「別の生き物って話もあるよな」

「だよな。別の妖怪だって」

「魂とは別にな」

「じゃあいいか？」

皆確証を持てないまま話していく。

「食ってもな」

「それでもいいか」

「それなら」

「俺は食うぞ」

一度決めたら引かない、それが秀であった。

「もうこうなったらな」

「決めたのか」

「どうしてもか」

「食うんだな」

「もう調味料も油も衣も用意したんだよ」

そこまで用意していた。既に決めていたのだ。

「だからだよ。捕まえてな」

「そうするか」

「で、俺達も一緒にか」

「食おうかってことだよな」

「人魂を」

「ああ、皆で食おうな」

秀はここではにこりと笑って言った。こう言ってからコーヒーを一口飲むのだった。

その独特のほろ苦さを口の中で楽しみながらだ。彼はまた言った。
「それでどうだよ」

「ああ、じゃあな」

「今夜墓場に行つてな」

「そうするか」

「そうだな」

彼等も結局頷いたのだった。そうしてそのうえで実際にその夜墓場に行った。それぞれその手には虫取り用の網と籠があつた。

まるで子供の頃の様になったその装備でだ。彼等は人気のない静かを通り越して不気味なその墓場に來たのであつた。

墓石が連なり草木が闇夜の中に浮かび上がっている。遠くから梟の声が聞こえてくる。それを聞きながら墓場の中に入るのだった。

その墓場の上にだ。人魂達がふわふわと漂っていた。

丸く尻尾が細くやや短い。そして青白い光を放ちながら。人魂達は墓場の上にいた。その人魂達を見てだ。彼等は言うのであつた。

「じゃあ捕まえるか」

「普通に虫取り網でいけるよな」

「あの漫画じゃそうだよな」

「ああ、捕まってるよな」

「それでいけるだろ」

秀は樂觀的に述べた。当然彼も武装している。

「虫取り網でな」

「それ言うとか蜻蛉みたいだな」

「ああ、浮かんてる高さだつてそうだしな」

「だよな」

皆もその人魂を見ながら話す。確かに浮かんている高さは蜻蛉の飛ぶ高さであつた。

「じゃあその要領で捕まえるか」

「そうだな。蜻蛉取りならな」

「よくやったしな」

「慣れてるしな」

「そういう要領でいいか？」

「ここは」

「とりあえず捕まえような」

秀はまた言うのだった。

「それからだよ」

「そうか、まずは捕まえてか」

「それからか」

「捕まえようとしてだな」

「そうだよな」

こうしてだった。とりあえず虫取り網を上を振る。するとだ。

本当に蜻蛉を捕まえる要領でだった。人魂が捕まるのだった。

そしてだ。それを水槽の中に入れる。実に簡単にだ。人魂達は特に暴れることなく水槽の中に入ってだ。大人しくしていた。

そしてだった。その人魂達を秀の家を持って行ってだった。すぐにそれをだ。

「生のままでいいんだよな」

「生きたままで食っていいんだな」

「衣をつけて」

「ああ、漫画じゃそうなってるからな」

秀が仲間達に話す。

「それじゃあこのまま着けてな」

「よし、じゃあな」

「そしてそこに入れて揚げて」

「食うか」

水槽の中の人魂を掴む。ここでも特に暴れない。

第三章

それを実際に揚げる。そこでも暴れずそのままだった。
そうして出来たのは細い尻尾のついた丸い天麩羅だった。衣は奇麗な狐色だ。

それを皿の上に乗せてかぶりつく。すると。

「おっ、これは案外」

「いけるな」

「ああ、美味しいな」

「そうだな」

皆箸を突き刺して食べてから言うのだった。

「味はコロッケだな」

「そんな感じだな」

「けれど食感は」

「蒟蒻か？」

「それに似てるよな」

食べてみてだ。そんな感じだったのだ。

味はまさにコロッケで食感は蒟蒻だった。美味しいものだったのだ。

「何かどんどんいけるな」

「ああ、油っこくないしな」

「しっこくないし」

「奥まですぐに火が通っていてな」

「醤油にも合う」

「いいよ、これ」

皆こう言ってどんどん食べていく。しまいには天麩羅だけでなく刺身にもしてみた。するとこれもであった。

「美味しい美味い」

「これもいいな」

「ああ、生でもいいんだな」

「何だ？生だと」

その場合はだ。どうかというのだった。

「馬刺みたいな味だな」

「ああ、蠶のところだよな」

「で、食感は蒟蒻のまま」

「いいな」

「美味しいよ」

こう話しながら刺身も堪能するのだった。

気付けば人魂達を全て食べてしまっていた。誰もが満足している。

「満足満足」

「満腹だよ」

「いやあ、漫画でも美味そうだったけれどな」

「実際に食ってみるとな」

「本当に美味しいな」

「だよな」

それぞれ言うのだった。秀の家のテーブルに座ってだ。

それで最後のお茶を飲む。ここであった。

ふとだ。秀が言うのだった。

「ところでな」

「ああ」

「どうしたんだ？」

「これ食ったらこれで終わりかね」

ここでこんなことを言うのであった。

「何か漫画じゃその後何かあったっぽいけれどな」

「あれっ、そうだったか？」

「何かあったか？」

「何かそんな気がするんだよな」

こう話すのだった。

「食えることはわかったけれどな。それでもな」

「何かあるか？」

「それで」

「だから何かあっただろ」
また言う彼だった。

「何だったかな、一体」

「腹壊すとかか？」

「そうだったのか？」

「毒あるとかか」

「おいおい、それ洒落にならねえよ」

一人が仲間の話に突っ込みを入れた。

「河豚とかみたいにかよ」

「そういえば河豚も美味いよな」

「人魂も美味かったしな」

「じゃあ若しかして」

「俺達これから毒でか」

秀達は不安に覆われた。そしてだった。

第四章

そのうえでだ。彼等はだ。それぞれ言うのだった。

「やばいなあ」

「このまま死んだら洒落にならないよな」

「美味しいもの食っても死んだらな」

「どうにもならないだろ」

「しかし食ったからな」

秀は腕を組んで述べた。

「もうこうなったら仕方ないだろ。食ったら何があってもな」

「そうか、もうな」

「開き直るしかないか」

「食ったんだからな」

「もうな」

仲間達も秀の言葉に頷くしかなかった。とにかく食べてしまったのだ。

それならばだった。もう腹をくくるのだった。

「よし、もう何が起こつてもな」

「いいとしようぜ」

「毒にあたろうが化け物に変わろうが」

「こうなったらな」

「何でも受け入れてやるさ」

こうそれぞれ言った。するとだった。

不意に彼等はだ。腹に感じたのだった。

「あれっ、さっきまで満腹だったのにな」

「ああ、何か急にな」

「腹空いてきたな」

「何でなんだ？」

皆このことにだ。いぶかしむのだった。

「あれだけ食ったのにな」

「急に腹が空いてくるなんだ」

「まだ食って二十分だぜ」

「それでか？」

「何でなんだ？」

こう話しているとだった。急にだった。

それぞれの尻からだ。何かが出て来るのを感じたのだった。

「えっ、まさか」

「大かよ」

「漏れたか、まさか」

「急に」

しかしなのだった。ここで皆こうも考えた。

「いや、幾ら何でもな」

「そうだよな。全員ってことはないよな」

「しかも食べてすぐだぞ」

「おまけに何もなくて急になってのは」

「ないよな」

こう考えたのだった。しかしだ。

実際に全員の尻から何かが出た。それはだ。

そのままそれぞれのトランクスやズボンから出てしまってた。上にあがっていく。それはというのだ。

「えっ、人魂が？」

「人魂が出て来たぞ」

「さっき食ったばかりなのにか」

「そのまま出て来たのか」

「何なんだ、これって」

秀もだ。この事態には呆然となった。

「食ってそれがそのまま出て来るって」

「まさかこんなことがあるなんてな」

「普通大になって出るのにな」

「しかも一日で」

「けれどそのまますぐにか」

「出て来るなんてな」

「有り得ないだろ」

皆その上にふわふわと漂う人魂達を見ながら言う。彼等は特に思考や知能があるようには見ええず海月の如く浮かんび飛んでいる。

彼等に特に襲い掛かるまでもなくだ。そのままであった。

「ああ、思い出した」

「何だ？」

「何をなんだ？」

皆秀の今の言葉に問うのだった。

「何を思い出したんだ、それで」

「一体」

「あの漫画だよ」

彼が読んで人魂を食べたいと思ったその漫画について話すのだった。

第五章

「あれな。人魂を食べたらな」

「ああ」

「どうなったんだ、それで」

「口から出て行って顔を取られたんだよ」

「そうだったというのである。」

「後で主人公の活躍で顔は戻ったけれどな」

「ああ、のっぺらぼうになったんだな」

「食ったら」

「そうはならなかったけれどそのまま出て行かれたよな」

「秀が言うのはこのことだった。」

「尻からだけれどな」

「そのままな」

「それは同じだな」

「だろ？ 同じだよな」

「ここでも言う秀だった。」

「それはな。しかしだよな」

「人魂って食われても全然平気なんだな」

「すぐに出てそれでまた飛ぶんだな」

「そうなるんだな」

「ああ、そうなんだな」

「また言う秀だった。彼もその人魂達を見上げている。」

「美味いけれどこれじゃあな」

「食ったって実感ないよな」

「満腹感が得られないしな」

「これじゃあな」

「けれど。何かほっともするね」

「秀はこんなことも言った。」

「食べて死なないっていうのはね」

「まあそうだな」

「結局何かを食べるって何かの命を貰うことだからな」

「それが肉でも野菜でもな」

「そうなるからな」

皆こう考えていく。食べるということは何かということだ。それは突き詰めていけばそういう考えに至ってしまうのであった。

それでだ。彼等はさらに話していく。

「食べたことになるかどうかわからないけれどな」

「それでもな。もう人魂はな」

「ああ、放っておくか」

「そうするか」

こう結論を出した。そしてだ。

家の窓を開けると人魂達はそのから外に出てだ。何処かへと去ってしまっただった。秀はその人魂達を見送ってからあらためて皆に話した。

「それじゃあだけれど」

「ああ」

「どうするんだ？」

「まだ衣はあるし油もあるしね」

言うのはこのことだった。

「食材もあるし。烏賊と鰯ね」

「じゃあそれ揚げて食うか」

「そうするか」

皆も彼のその提案に頷いた。そしてだ。

「俺ビール買ってくるな」

「それで一杯やるか」

「楽しくな」

「うん、そうしよう」

秀もビールと聞いて笑顔になった。

「それじゃあね」

「よし、じゃああらためて食うか」

「それで飲むか」

「そうするか」

皆気持ちを切り替えてまた食べることになった。だが彼等はこれ以降人魂を食べることはなくなった。そして捕まえることもだ。二度としなかった。

人魂料理 完

2010・11・25

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2192s/>

人魂料理

2011年4月4日21時25分発行